

## 〈棄民〉〈核災〉——あたりまえの生活を奪われた現実

昨年十二月に、前著『福島原発難民』の姉妹編ともいうべき『福島核災棄民』を同じコールサック社から出版しました。ともに〈難民〉〈棄民〉という目にしただけで忌避されそうなまがまがしいことばをふくむ書名であることを承知で名づけました。

さらに、読者の皆さんにとって、〈核災〉ということばは初めてかと思います。3・11以後、私は〈原発事故〉という表現に疑問を抱くようになりました。進行している事態は〈事故〉という概念を超えた、人の心にも踏み込み、空間的にも時間的にも広範囲に影響を及ぼす〈核による構造的な人災〉だと認識したとき、この事態を表現するのにふさわしいことばが必要だと考えました。そんなとき、中国では〈原発事故〉を〈核災〉と表記していることを知り、以後、私はできるかぎり〈核災〉を用いています。〈原発〉を〈核発電〉と表記するのも、その本質に内在する非人間性を意識するためなのです。私の考えに共感してくださる方がけっこう多いのです。

『福島核災棄民』には、詩「海辺からのたより 二」（一九八二年）とチェルノブイリ訪問記「キエフ モスクワ 一九九四年」を収載しましたが、そのほかは3・11後に発表した作品です。国が「原発事故の〈収束〉」を宣言して一年が過ぎました。しかし、福島第一核発電所はいまも一時間あたり最大百万ベクレルの放射性物質を放出していて、廃炉までに三、四十年を要するとされています。そのあいだに激しい地震があったらどうなるでしょう。あたりまえの生活を奪われた福島県民のうち十六万人が県内外で避難生活に耐えています。二十七年後のチェルノブイリの現状を見るなら、福島核災は〈終煩〉どころか、被災住民に先の見えない長い苦難を強い続けることでしょう。私たちを日本国から差別され、棄民されている存在だと、私は規定せずにいられません。こうした現状を知って欲しいという思いで一冊にしました。

『福島核災棄民』に加藤登紀子さん作曲・歌「神隠しされた街」のCDが付いています。

なお、『福島原発難民』は、福島核災発生後五日間の記録「原発難民ノート——脱出まで」だけが書き下ろしで、そのほかのエッセイと詩は3・11以前の作品です。最初のエッセイは、福島第一の一号機が運転を開始した一九七一年秋に書いた「大熊」です。つまり、この本は、私の住まいから二十五キロの近傍で稼働しはじめた核発電との四十年にわたる〈つきあい〉の記録集でもあります。こちらも読んでいただきたいと願っています。

（わかまつ・じょうたろう氏＝詩人）

と紹介されています。